

古谷宣幸展
天目茶盃と食の器



2019年3月9日(土) ~ 3月17日(日)

GALLERY
うつわノート

料金後納
ゆうメール

古谷宣幸 展 天目茶盃と食の器
二〇一九年三月九日(土) ～ 十七日(日) 会期中無休
営業時間 十一時～十八時 作家在廊日 三月九日(土)

信楽の古谷宣幸さんの器に出会った当初は、黒高麗のような飴釉やしっとりした粉引の作り手という意識がありましたから、その延長線上で茶盃を作るなら当然、朝鮮系のもと思っていたので、最近の天目茶盃の仕事を見て意外に思ったものです。しかし聞けば18歳の頃から天目に取り組んでおり、寧ろこちらが先であったと知り納得したのです。茶盃の極にある天目は室町時代の東山御物を代表するものであり、その煌めく宇宙の様相は、侘び寂びの内的概念とは違い、外形的に美しい姿で誰にも具象的で形容し易い茶盃であると言えます。その妖しい美しさの虜になる多くの作家があり、特に曜変天目になると、化学的分析で理論的に突き詰めて臨む作り手もあります。それに比べて古谷さんの天目は、当時の建窯と同様に薪窯によるシンプルな構成で、これを実現しているのが特徴なのです。しかし作り出される釉調は決して単純ではありません。兎毛のごとく細かで煌めく釉が内に向かって連なり、奥に吸い込まれる磁力を感じるのです。ここ数年の完成度は高く、天目茶盃作家として広く認知されるようになってきました。しかし興味深いのは、同時に食の器も作り続けている点です。天目の呪縛は、無間地獄のごとく深く深く落ちていく恐ろしい側面も伴います。茶盃だけに妄信するのではなく、食器の両者を手掛けながら全体としてバランスを失わない、ここが肝心なのです。考えてみれば建窯の天目も瀬戸で模された天目も実に幅が広い。生活という裾野から積み上げた中から極上が生まれる。暮らしと連続するうつわであることが、お互いを高め合う事に繋がるのです。今展では、天目茶盃と食の器の両者が並びます。美に酔うか、食に酔うか。いずれも楽しめる贅沢な内容になりそうです。店主

古谷宣幸(ふるたに・のりゆき)プロフィール

- 1984年 滋賀県信楽町生まれ
- 2003年 信楽高校デザイン科卒業
- 2005年 京都嵯峨芸術大学短期大学部陶芸コース卒業
- 2007年 中里隆氏に師事
米国コロラド州アンダーソンランチアートセンターにて作陶
滋賀県立陶芸の森レジデンスアーティスト
- 2008年 デンマークスケルツコーにて作陶
- 2009年 岐阜県土岐市花ノ木窯にて作陶
- 2015年 米国コロラド州アンダーソンランチアートセンターゲストアーティスト
- 2019年 滋賀県信楽町にて作陶

ギャラリー うつわノート

埼玉県川越市小仙波町1-7-6
TEL 049-298-8715
MAIL utsuwanote@gmail.com



電車：川越駅(東武東上線・JR)より徒歩25分
本川越駅(西武新宿線)より徒歩20分
バス：駅東口3番乗場 [小江戸名所めぐり] ~ [喜多院前]
駅西口2番乗場 [小江戸巡回バス] ~ [喜多院]
車：ギャラリー専用駐車場は北側(5~8番)

